地球を履いて

渡邉卓矢

目次

プロローグ　初めてサッカー選手に憧れた日　3

ある程度までは評価されても、トップまでは届かない　6

アルゼンチンでの海外サッカー初体験　10

カンボジアを訪れ、やっとの思いで初契約に！　16

孤児院に訪問し、運命的な出会い　23

女子のサッカーチームに支援を　29

ラオスから日本のクラウドファンディングに挑戦　36

エピローグ　47

プロローグ　初めてサッカー選手に憧れた日

朝六時。まだ外は薄暗い。窓の外で大人の人が数人バラバラと走っている音が聞こえた。

「ママ～！　また外で走っている人がいる」

保育園の年長になったばかりの僕はカーテンを開けて窓の外を眺め、キッチンに立つ母に聞いた。

「近くにサッカーチームの寮があってね、その人たちが毎朝トレーニングで走っているんだよ」

たまに早く起きたとき、自宅の外を大人の人たちが走っているのは気が付いていた。見ると、黄色と黒の服を着て、朝早いのにピシッとして、黙って走る姿はとてもかっこよく見えた。

「あの人たち、サッカー選手なの？」

「そう。柏レイソル、っていうチームのサッカー選手だよ。近くで試合があるから、今度観に行ってみる？」

「うん！　行く」

テレビでサッカーを見たことはあったし、保育園でもボールを蹴って遊ぶことはあった。でも、まだ本物の試合を見たことはない。

数週間後の週末、父と母、姉、僕の四人で柏サッカー場へ試合を見に行った。その時の衝撃は今もありありと覚えている。

通常のスタジアムは、サッカーコートのまわりに陸上トラックがあり、観客席からは選手の姿が少し遠い。だが、柏サッカー場は陸上トラックがなく、観客席からサッカーコートがとても近いのだ。

僕たち家族の席は前から三番目で、子どもながら選手に手が届くんじゃないかと思うほどだった。

選手たちは、窓から眺めていた姿よりもずっと身体が大きく見えた。素早い動き、真剣な表情、流れる汗が、圧倒的な迫力だった。

「サッカー選手になりたい」

それが僕の、サッカー人生の始まりだった。

12

ある程度までは評価されても、トップまでは届かない

五歳からサッカーを習い始めた僕は、たいていチームのエースだった。周囲より上手にできるという実感があるから、「プロサッカー選手になる」という夢はどんどん強いものになっていった。

柏レイソルには、「柏レイソルアカデミー」という育成のための組織がある。セレクションと呼ばれるテストに合格した人だけが入れる子ども向けのチームだ。

僕は小学四年生のとき、初めてセレクションを受けた。自分で上手くいった実感はあったが、メンバーには選ばれなかった。その後、五年生、六年生と受け続けても、結果は同じだった。

何年も経ってから当時のコーチと仲良くなり、理由を尋ねたことがある。合格した人たちに、総合的に劣っているとは思えなかったからだ。

「優しすぎる選手は採らないんだよ」

「え？　どういうことですか？」

「セレクションでは、『教えられない技術を持っている子』を探しているんだ。いったんボールを持ったら、ひとりでゴールまで突き進んでいってしまうような子だよ」

「でも、そんなワンマンプレーでは……」

「そう。だけどメンバーと協力するような戦術は、チームに入ってから教えればいい。一人で何人も相手にして打開していくガッツや技術は、誰かから教えられるものじゃないんだ」

僕は小学生の当時から、周囲にパスを回していくような、いわゆる「いいプレー」をする子どもだった。セレクションのときにはそんなエゴイスティックなプレーをする選手は選ばれないと思い、周囲にパスを回すプレーを心がけていたのだった。

柏レイソルのチームには入れなかったが、中学校に上がるタイミングで、柏市が柏レイソルと提携した選抜チームを作った。僕はそのチームに選ばれた。

中学校の部活と、柏市の選抜チームで練習し、試合に出ながら、サッカーの技術を磨いていった。中学三年生になると少し物足りなくなり、千葉市で活動しているクラブチームの練習にも参加するようになった。

「お姉ちゃんの学校って、どう?」

ある日曜日、夕食後にソファに座りテレビを見ながら、ダイニングチェアに座る三歳年上の姉に聞いた。

「え？　どうって？」

「いや、俺が行くとしたらどうなのかなって」

「うちの高校に入りたいの？」

姉は、近所でも比較的評判の良い私立高校の三年生だった。

「うーん、少しね」

「サッカー部は強くないよ」

「知ってるよ。でも、俺はサッカーで生きていくにはちょっと中途半端だし、勉強の道も残しておいたほうがいいかな、って」

「だったらいいんじゃない？　勉強は割としっかりしてるし、大学も結構選べるよ。いまから真面目に勉強すれば大丈夫だと思う」

サッカーで誘われていた高校もいくつかあったが、サッカーだけに賭ける気にはなれなかった。結局、姉が通った高校へ進学することにした。

サッカー部には入ったが、サッカーを楽しくやれればいいというチームメンバーとの温

度差を感じていた。勉強をおろそかにしたくないという思いはありつつも、プロになるという目標を持ち、柏市の選抜チームでの練習も続けていた。

「本当はもっとやれるのに、なかなか評価されない」――そんな気持ちが、いつも心の奥にくすぶっていた。

アルゼンチンでの海外サッカー初体験

「サッカー留学について話を伺いに来たのですが」

僕は、大学一年生の時、学生の留学を支援する会社の人と会うために八重洲のカフェを訪れていた。

「初めまして。今井と申します」

名刺をくれた今井さんは、じっくりと話を聞いてくれた。

「どうして、海外でサッカーがやりたいんですか?」

「それは……プロサッカー選手を目指しているからです」

石井さんは僕のサッカーのレベルも知らないし、プロになりたい気持ちの本気度もわからない。僕の実力を探るように、質問を重ねてきた。

「今はどんな活動をしているんですか?」

「体育会のある大学に入って入部テストに合格したんですが、チームに不祥事があって入学前に活動停止になってしまったんです。だから今は、社会人チームで活動しています」

「どこのチーム？」

「茨城のつくば市にあるチームで、練習は週に三、四回ですね。茨城県の一部リーグですが、そこまで強いというわけではないかも……。ただ、海外に目を向けている人が多いから、話を聞くうちに海外に行きたいと思うようになりました。サッカー雑誌にヨーロッパ留学のプランが出ていたので、行ってみようかと思ったんです」

「日本でそのままプロになるのは、ちょっと難しいんだ？」

「高校が有名だったり、Ｊリーグクラブの選手だったりしないと、セレクションに参加する機会もなくて……」

「セレクションって、選手選考会のこと？」

「そうです。基本的に一般募集はされていなくて、高校の先生のつながりで選手の紹介などがされているんです。僕は子どものころから市の選抜チームでサッカーをしてきましたが、輝かしい経歴があるわけではないので……」

今井さんは、僕の名前が書かれている書類のメモ欄に、ボールペンで何やら書きつけていた。

「日本では認めてもらえない感覚があります。実力主義の海外で、力を試してみたいんで

す」

「それで、ひとまずは夏休みを利用して行ってみたい、ということなんですね」

今井さんは書類を見つめて少し考えてから、僕にこう言った。

「個人的に南米のアルゼンチンにツテがあるから、そこなら短期でも頼めるかもしれない」

「アルゼンチンですか」

マラドーナやメッシを輩出したアルゼンチン。聞いた途端「行きたい」と思った。

夏休みになってすぐの一ヶ月、地球の反対側、アルゼンチンのチームで、僕はサッカーをすることになった。

意気揚々とチームの寮に入れてもらい、一緒に集団生活をしながらプレーをする予定だった。だが、現実は甘くない。チームには、僕以外にもボリビアやチリなど、他の国からさまざまな選手が来ていたが、アジア人は僕ひとりだけ。他国から来ていた選手たちは、僕と目を合わせるたびに「イエロー」「ニンジャ」「サムライ」といった言葉で僕をからかう。

スペイン語は多少勉強していたが、喋れるレベルではないし、アルゼンチンは訛りも強い。それでも、寮で一緒に暮らしていくには意思疎通も必要だ。紙の辞書を持ち歩き、何とかコミュニケーションしていた。

徐々に言葉がわかってくると、話の内容もわかるようになってきた。「日本人がなぜサッカーをやっているんだ?」と、彼らにとっては不自然極まりないことのようだった。

多少差別されていても、言葉が通じなくても、サッカーのプレーはできる。だから練習には行くが、それ以外は寮で部屋を閉め切って、食事以外ではなるべく選手たちに会わないようにして暮らしていた。

サッカーができるのは嬉しいが、毎日息苦しかった。

ところが、三週間ほど経ったある日を境に、僕の環境は一変することになる。

「今日はタクヤが試合でゴールを決めた!」

夕食のときに、メンバーの一人が口火を切った。

歓声が上がり、みんなが僕に笑顔を向け、ハイタッチをしたり、肩を叩いたりしてきた。今まで全く相手にされていなかったのに、その日の夕飯は僕が主役になったようだった。

翌朝、寮でメンバーに会うと目を合わせて挨拶をしてくれる。「今日も頼むよ」なんて言葉もかけてくれる。練習中もこれまでと違い、パスがよく回ってくるし、よく声をかけられる。みんなが「イエロー」ではなく「タクヤ」と呼ぶ。

「こんなにも変わるのか」

僕は実力主義の世界を思い知った。

それまでも、劣っているつもりはなかった。基礎練習では僕が一番うまいと言ってもいいくらいだ。基本的に日本人は、「ボールを止めて蹴る」といった基礎の部分が上手だ。一方でアルゼンチン人のメンバーは、同じような基礎練習をしても「全然できない」と言っていいほど。だが、試合をすると、基礎練習ができていないメンバーも活躍したりする。

僕は基礎練習が上手で試合のメンバーにも入っていたが、戦力としてはまだ認められていなかったのだろう。だが、ゴールを決めてみんなに認められた後は、基礎練習で見本にされることもあった。アルゼンチ

ン人が嫌がる持久走なども真面目に走っていたので、コーチからも信頼されている実感があった。

最後の一週間、僕はメンバーやコーチに認められ、思いきりサッカーができる喜びをかみしめながら、跳ねて、走って、蹴りつづけた。

カンボジアを訪れ、やっとの思いで初契約に！

嫌な予感を覚えながら、耳にあてたスマートフォンが「プルルルル」と鳴る音を聞いていた。先ほど、留守番電話にッセージが入っていたからだった。

「話さなきゃいけないことがあるので、折り返し電話ください」

相手は、僕が四月からプレーすることになる四国のチームの監督だ。Ｊリーグクラブの合同テストに参加したときに声をかけてもらい、一ヶ月ほど練習に参加した。

監督は僕を気に入ってくれたようだった。

「ぜひ、うちに来てほしい。ただ、一軍にはベテランもいてすぐに入るのは難しいから、まずはサテライトリーグで経験を積んでもらい、その後で一軍に上がると思ってもらえれば」

サテライトリーグとは、いわば一軍に入れないメンバーが二軍チームとして活動するリーグ戦のことだ。一軍ではないものの、そこで頑張って成果を出せば、認めてもらえる。大学を中退して、サッカーに賭けてきたのが報われる思い。僕は二つ返事でＯＫを出した。

だが、その監督からの留守電メッセージは、声のトーンが暗く、よくない連絡のように思えた。監督が電話に出ないのでそろそろ切ろうとしたときに、電子音が途絶えて声が聞こえた。

「もしもし、卓矢？」

監督は、すぐ本題に入った。

「残念な知らせで申し訳ないが、今年いっぱいでサテライトリーグが廃止されることになった」

「え？」

一年間は活動できるが、その翌年は行く場所がないことになる。

「チームにとって来てほしいのはやまやまだが、来年にはなくなることが分かっていてこちらに呼び寄せるのは、卓也のキャリアを考えると申し訳ないと思っている」

「一年後、僕が一軍に上がれる可能性ってどれくらいだと思いますか？」

「うーん、正直難しい。今の段階では、チーム内でも下の方の評価になるとは思う」

先日、練習試合の相手に日本代表の選手がいて、力の差をまざまざと感じたばかりだった。やはり、日本のトップレベルにはまだまだ遠いのか。

「わかりました。少し考えさせてください」

そう言って、電話を切った。

僕の実力では、トップレベルには届かない。四国まで行って、サテライトリーグもないままに練習したって、成長はたかが知れているだろう。他の可能性をつぶして、ひとつのチームの二軍に入ることも、リスクが大きすぎる。

そこで頭をよぎったのが、海外に行く道だった。数日考えて四国行きを断念した僕は、海外チームを目指す選手を集めた「ＨＢＯ東京」というチームに入ることにした。

ＨＢＯ東京はまだ実績が少なく、海外チームへどんどん人を送り出せるという状況ではなかった。そのため、アルバイトで生活費を稼ぎながら、日本でコツコツと練習する日々。午前九時から十一時ごろまで練習をして、そのあとにアルバイト先へ出勤していた。

そんな暮らしをして一年ほど経った頃、カンボジアに日本選手の需要があると聞く。僕はすぐさま手を上げた。

日本は年末で、冬の真っただ中。そこから、気温三十度前後もあるカンボジアに降り立った。

カンボジアは一月から二月初頭が新しい選手と契約できる時期で、多くの外国人選手がこの期間に訪れ、テストとして練習や試合に出る。チームの練習に参加して、「来てほしい」

というオファーがあれば晴れて契約になるのだ。

初めて練習に参加したクラブでは、かなりの手ごたえがあった。控えめに見ても、僕が技術的には一番上。クラブ内でゲームをすると、相手の動きがスローに見えるし、同じチームメンバーのミスにはもどかしさを感じるほどだった。攻撃に回ればゴールを決め、守備側に回れば相手に点を取らせなかった。

練習が終わると、監督もコーチも満面の笑みで満足げだった。僕は早々に契約が決まるかと思ったが、そうではない。「この後にいい選手が来るかもしれない」という期待からなのか、「ぜひ来てほしいが、契約は少し待ってほしい」というのがチーム側の意向だった。

最初は少しなら待ってもいいと考え、同じチームの練習に行き続けた。だが、もしかしたらこの時間を使って別のチームに行ったほうがいいのかもしれない。

通訳の人を経由して「すぐに契約できないなら、他のチームの練習に参加するが、それでもいいか？」と伝えると、それでもいい、という。それから、僕はいくつものチームの練習に参加していった。

「今日なんて、どう見てもすごい結果出したんだけど」

僕は同じ部屋で暮らしているカズとマリンに愚痴っていた。

「どうだったの？」

「クラブ内のテストマッチで俺は前半出てなくて、こちらのチームは〇対二で負けてたわけ。後半になって俺が出て、シュートを三本決めて三対二だよ！　これは契約もらったなって思って、周囲もそんな雰囲気だった。でも、契約には至らないって言うんだ」

「え～。なんで？」

「『結果がすべてじゃない』って。じゃあ、どうすればいいんだよ」

「ひどいなあ……。タクヤは、オファーあったの何チームだっけ？」

「えーと……五チームかな。全部『まだ契約できません』って待たされてる」

「割と早く決まった人たちもいたのにね。そういう人はどうして決まっていくんだろう」

日本から一緒に来た選手は他に何人かいたが、残ったのは僕たち三人だけ。他の選手は、先に契約を済ませたり、途中であきらめたりしてすでに日本に帰国していた。日本にいながらフェイスブックのメッセンジャーで直接連絡をして、現地を訪れずに契約をまとめた選手もいる。

「最終日まであと半月か……。だんだん、選手を取るほうも焦ってくるんじゃないのかなあ？」

「そうだといいんだけどね」

焦る気持ちをだましだまし、僕は翌日からまたクラブチームの練習に向かった。せっかく日本を離れてこの地まで来たんだから、ここであきらめたくない。こんなにギリギリまで粘るとは想像していなかったが、ここまで来たら最後までやろうと決めていた。

「やった！　契約できたよ」

ある日、僕がクラブチームの練習から帰宅すると、ダイニングチェアに座っていたマリンが立ち上がってそう告げた。先日契約が決まったカズに続く朗報だった。

「ついに俺が最後の一人か」

頭に浮かんだ言葉に、胸がつぶれるような思い。でも、カズの契約は素直に嬉しい。

「よかったな！　粘った甲斐があったじゃん。どこのクラブ？」

カズの活躍と、所属するクラブチームの話を聞いた。カズは僕に遠慮がちに喜んでいたが、それも申し訳ないような気がした。僕はその夜、少ない残り日数を数え、悶々としながら眠りについた。

翌朝、電話の着信音で目がさめた。

「タクヤ！　契約が決まった！」

エージェントからの電話でそう言われ、ベッドから飛び起きた。契約をしたいと申し出てくれたのは、最初に訪れたクラブの監督だという。そのクラブは別の海外選手と契約をしたはずだが……。

「その監督は、タクヤのことをずっといいと思っていたんだって。監督が別のクラブに移籍することになって、『やっぱりタクヤが欲しい』って探し回っていたというわけ。やったじゃないか！　おめでとう！」

また連絡する、と言い残したエージェントの電話を切ると、僕はベッドに大の字にひっくり返った。

やっと、やっと本当のサッカー選手になれるんだ。

孤児院に訪問し、運命的な出会い

友人の砂原さんから連絡があったのは、孤児院を訪れる数週間前だった。砂原さんは、僕がアドバイザーを務めている京都紫光サッカークラブLadiesのマネージャーだ。

「日本の企業が、孤児院を訪問してくれるサッカー選手を探しているそうなんです。卓矢さん、やってみませんか？」

その企業は、日本の古着をカンボジアで販売する事業をしており、その収益の中から少しでも孤児院の支援をしたいという。支援したい孤児院は、日本人の柳井さんという方が運営している。

カンボジアではサッカー人気が高く、子どもたちもサッカーが大好きだ。そのため、プロのサッカー選手を呼んで、子どもたちに喜んでもらいたいという趣旨らしい。

砂原さんからの連絡に承諾をしたものの、僕は孤児院のイメージが持てていなかった。「親のいない子ども」「貧しい子ども」というイメージで、どんな顔をして会ったらいいのかと、不安が大きくなっていた。

「そもそも、僕でいいんだろうか」

今の僕は、プロになる夢がかない、大きな目標を見失ってしまった。「楽しいことをしてお金をもらえるなんて幸せだ」と、カズやマリン、その他の仲間と話すものの、自分たちに言い聞かせているかのようだった。

子どものころからずっと抱き続けていた「プロサッカー選手になりたい」という夢は、こういうことだったんだろうか。クラブとして試合に勝つのは大事で、それを目標に練習をしているが、自分自身の目標はどこにあるのだろう。

「俺はどうしてサッカーをやってるんだろう?」

孤児院へ向かうバスに揺られながら、そんなことを考える。支援企業の代表として同行してくれた黒川さんに促されるままに降り、少し歩いて孤児院に着いた。そこには低い塀に囲まれた敷地と、小さな建物があった。

恐る恐る敷地に足を踏み入れると、小学生から中学生くらいの子どもたちが笑顔で走り寄ってくる。

「こっちへ来て！　一緒にサッカーしよう」

言葉はわからないが、きっとそう言っているのだろう

僕は挨拶もそこそこに、手を引っ張られるままサッカー場へ連れていかれる。サッカー場には他の子どもたちもいて、あっという間にボールを蹴り始めた。小さなゴールが置かれており、二チームに分かれて戦う。悔しがったり、喜んだり、叫んだり。そんな子どもたちがまぶしくて、僕はいつの間にか夢中でプレーしていた。

気が付くと、子どもたちは靴を履いていない。僕も思わず靴を脱ぎ、一緒に裸足でプレーする。気が付けば一時間半ほど経っていた。

まぶしい笑顔、まっすぐな情熱。ここへ来る前、彼らを「貧しい子どもたち」と想像していた自分が恥ずかしい。心が貧しい

のは、僕の方じゃないか。

「将来はお兄ちゃんみたいなサッカー選手になるから。そうしたら一緒に対戦しよう」

サッカーが終わり休憩して、英語ができる大人も含めてみんなで話していると、子どもたちが口々に言う。

「楽しみにしてる。負けないからな！」

そう言いながら僕は、子どものころのことを思い出していた。

近所のサッカー選手に憧れて、「僕もサッカー選手になる」と決めた。今度は逆の立場で、ここにいる子どもたちが、僕に対して同じように思ってくれている。

「その思いに応えられるよう、子どもたちに憧れられるようなサッカー選手でありたい」

そんな気持ちが湧き上がってくるのを感じた。こんなに奮い立つ気持ちになったのは、プロになって初めてかもしれない。

「プロになれたことで、目標を見失ってしまった」なんて言っている自分を情けなく、恥ずかしく思った。彼らのようなたくさんの子どもが試合を見に来てくれたり、応援してくれたり、僕たちを目指してくれるのが、僕がサッカーをやる意味だったんだ。

「孤児院訪問、またぜひやらせてください！」

帰りのバスで、僕は同行してくれた黒川さんに熱く語っていた。

翌年、モンゴルのクラブチームに移籍した僕は、冬のオフシーズンを利用して、孤児院の子どもたちがもっと楽しめるイベントをやりたいと思っていた。

自分が子どものころ、初めて観に行った試合で感動したことを思い出していた。孤児院の子どもたちにも、同じような体験をしてほしい。本物を見たら、子どもたちの刺激になるだろうと思った。

僕はカンボジアのチームから離れてしまったから、今年もカンボジアのクラブでプレーしているカズの試合を、子どもたちに見てもらおう。

「今年は、子どもたちを試合に招待するのはどうでしょうか?」

孤児院の柳井さんに連絡すると「いいんじゃない！　応援しているよ！」との返信。僕はすっかりアテンドしてもらうつもりでいたから、その言葉には少し面食らった。でも、ここで僕が「それならやらない」と判断したら、孤児院への訪問はなくなってしまう。

柳井さんとは、一緒に連携を取りながら進めることにした。試合を見に行きたいのは八十九人。移動手段となるバスは柳井さんがチャーターしてくれることになった。試合のチケット代は、クラブチームに交渉して、無料で提供してもらった。あとは、食事だ。ちょ

うど昼食の時間にかかるため、ハーフタイムに屋台に来てもらい、子どもたちが食べられるようにした。

試合中、子どもたちは興奮し、必死で「カズ‼　カズ‼」と声援を送っていた。盛り上がる試合でも、これほどまでに名前を呼んでもらう機会はあまりない。

試合後には集まって話をしたり、写真を撮った。さっき試合に出ていたカズが、今は手の届く距離にいる。一連の体験は、子どもたち自身が「あのグラウンドに行けるかもしれない」と感じるリアリティにもつながるだろう。

これからも毎年、この子たちに支援をしていこう。彼らに夢を与えるのが、僕の使命なのだから。

女子のサッカーチームに支援を

プロ二年目に契約したクラブチームのあるモンゴルは、とにかく寒い。朝、マイナス八度でランニングをしていたら、汗が凍って「つらら」になっていたこともあった。また、マイナス十二度で試合をしたときには、「体が冷えるから休憩を入れないで欲しい」と運営側に交渉したほど（受け入れもらえなかったが）。ユニフォームは、上半身は長袖でも下半身は短パン。ボールが当たって痛いどころか、外に立っているだけで皮膚が痛い。

クラブチームの練習は、毎日午後三時くらいからスタートして、二時間ほどで終わる。午前中の時間がもったいない気がして、サッカー協会が持っているスタジアムでランニングをするのが日課になっていた。

ある日、スタジアムで走っていると、中高生くらいの女の子たちがサッカーの練習を始めた。

「女子サッカーか。代表チームなのかな」

サッカー協会のスタジアムで練習しているから、モンゴルの代表チームなのだろうと予

想した。少し見ていると、監督は日本人のようだ。近寄って、話しかけてみる。

監督は壱岐さんといい、やはり日本人だった。教えているのは、U－16（十六歳以下）の女子代表チームだという。

以前から、カンボジアで孤児院の支援をしたように、ここモンゴルでも何か社会的な活動をしたいと思っていた。チャンスかもしれないと思い、壱岐監督に申し出ると、快い返事をくれた。

「もしよければ、この選手たちの練習を見ていただきたいです。私はもう年を取ってしまって、実際にプレーを見せることはできないので、選手たちのお手本として見せてもらえればこんなにありがたいことはない」

僕はその日から、女子代表チームのプレイングコーチをすることになった。モンゴルで開催するアジアの大会まで一ヶ月間、午前八時から十時、毎日練習をした。

大会が終わると練習が休みになり、また次の大会がある一、二カ月前に練習をスタートする。僕はそのたびに呼ばれ、選手たちの練習を見ていた。

その間にいろいろわかったことがある。ひとつは、女子の選手はとても素直で協調性があり、監督の言うことをよく聞き、上手くなる方法を熱心に考えているということ。

クラブチームで一緒に練習する男子選手は、自己中心的な選手が多い。プレーだけでなく性格的にも同様で、僕は結構な不満を感じていた。そのため、素直にアドバイスを聞いてくれる女子選手にとても感動を覚えたのだ。

一方で、モンゴルという国の中で、女子のスポーツはかなり肩身の狭い思いをしていた。男子が優遇されていて、女子は二の次。女子が「もっと練習したいから」と練習場を予約しようとしても「男子チームに聞いてから」と待たされる。

男子以上に熱心に練習して、意欲もある女子チームがないがしろにされている状態を理不尽に思い、僕の名前で練習場を借りることもあった。

「彼女たちのシューズ、スタジアムの人工芝と合っていないですよね？　筋肉や膝を痛める原因にもなると思うんです。これだけ頑張ってやっているのに、怪我しちゃったら元も子もないというか……」

僕は、スタジアムで彼女たちのプレーを見ながら、以前からずっと気になっていたことを監督に話した。

「国内にサッカー用具の専門店がないんですよ。シューズもなかなか買えなくて、中国から輸送してもらうか、試合で海外に行ったときに買うしかないんです」

彼女たちは、海外にツテがないから適したシューズを手に入れることができない。でも、日本と連絡が取りやすい僕なら、できることがあるかもしれない。

カンボジアの孤児院訪問の話を僕に持ってきてくれた砂原さんに連絡して「何かできないだろうか？」と相談した。

砂原さんは京都に住んでおり、関西最大のスポーツショップ「モリヤマスポーツ」が近くにあるという。「ちょっと聞いてみるよ」と言ってくれて、なんと話を付けてきてくれた。

僕たちの意向に共感してくれたモリヤマスポーツさんは、保管していたシューズを、モンゴルの女子選手のために提供してくれるという。

話はとんとん拍子に進み、僕はシューズを受け取るために日本へ一時帰国した。京都の伏見にあるお店に伺い、約三十足のシューズを受けとり、柏市の実家に送った。

実家ですべて開けて検品したところ、中古も混じっていた。十分に使えるものだったが、やはり新品よりは見劣りする。僕がもらう側だったら、絶対新品がいい。中古だとわからないようにしたいと思い、紐を外して洗濯し、シューズも汚れを落として磨き上げ、乾燥させた。

「これなら新品だと思うだろう」

僕は自信をもってスーツケースに詰め込み、モンゴルへ向かったのだった。

ところが。

「このシューズを売って商売するんだろう?」

シューズを入れたスーツケースは、モンゴルに入るための税関検査で止められてしまった。

「すべて、サッカーをやっている女の子たちにプレゼントするんです」

「そんなわけないだろう」

係員はぶっきらぼうにそう言い、「八〇〇万トゥグルグ払ったら渡してやる。そうじゃなきゃ今は渡せないから置いていってもらう」と言う。

日本円で三十万〜四十万円にもなる額を払えるわけもない。僕は途方に暮れた。

帰宅してチームメイトに事情を話すと「タクヤは日本人なのにモンゴルのためにそんな支援をしてくれている！　それなのに税関でそんな扱いを受けるのはおかしい！　俺たちが解決してやる！」と一緒に怒ってくれた。

翌朝彼らと待ち合わせると、チンピラみたいな恰好をして、悪そうなサングラスをかけている。いかつい風貌で、相手を威圧するらしい。そんな彼らにすごく温かみを感じた。

「タクヤはここで待ってろ。行ってくるから」

僕は空港の駐車場の車の中でしばらく待つことになった。一時間ほどしたら、スーツケースを引いてチームメンバーが戻ってきた。

「このスーツケースで合ってる?」

「そう！　ありがとう！」

「申し訳ないんだけど、二十万トゥグルグだけ払える?　それだけ払えばカタが付くから」

日本円で七千円ほど。それくらいならいいだろう。僕はチームメイトにお金を渡し、スーツケースを受け取った。

女子選手たちにシューズを渡すのは、大事な試合の前日になった。

練習をしているグラウンドに行き、練習が終わるのを待ってシューズを渡す。

この時には、モンゴルの知人を経由して、新聞社などメディアも呼んでもらった。僕ひとりで何かをしても、「良かったね」で終わってしまう。発信することで、次の何かにつながるかもしれない。

サイズごとにシューズを並べて、その前に女子選手たちが整列した。練習終わりで息が上がる中、壱岐監督がいきさつを説明してくれた。さらに、「明日は大事な試合で、新しいシューズを履いたら靴擦れするかもしれないから、明日は控えるように」と付け加えた。

「じゃあ、どうぞ！　好きなのを持って行って！」

僕が言うと、わーっとシューズに群がる女子選手たち。「これがいい」「あれがいい」と次々に履いて吟味している。取り合いになり、じゃんけんを始める選手もいた。その様子を、記者の人たちが写真に収めていた。

翌日の試合では、監督に言われたことを無視して何人もの選手が新しいシューズを履いていた。よほど嬉しかったのだろうと、ほほえましかった。

新聞にはシューズのプレゼントの記事が載り、僕はたくさんの人から「モンゴルのためにありがとう」というメッセージをもらった。

ラオスから日本のクラウドファンディングに挑戦

二〇一七年にモンゴルのチームと契約が切れてから、ネパール、タイ、再びモンゴルと、いくつかのクラブチームに所属した。それぞれの国はいいところもあるが、苦手なところもあった。

二〇二〇年から、ラオスのチャンパーサックというクラブチームに行くことになる。お世話になっていたエージェントからの紹介で、順調に契約まで進んだが、その直後に突然広まったのがコロナウイルスだだった。

リーグの開催も不明、移動もなかなかできない、外出制限もある。そんな中、僕が所属したクラブチームは、リーグへの不参加を表明した。

コロナで海外へ行けないため、僕はラオス内で移籍先を探した。幸い、ビエンチャンFCというクラブチームに入れることになった。

ところが、今度はビエンチャンFCのスポンサーがコロナにより撤退する。チームは、僕たち外国人とは契約をしているから給料を支払うが、ラオスの選手には最低限しか払え

ない状況になっていた。

「これでは、試合に勝てないですよ」

僕は、監督や事務局に相談を持ち掛けた。チーム側でも課題感を持っていたので、いろいろな意見を出し合った。

「スポンサーが現れるのを黙って待っているんじゃなくて、探しに行ったほうがいい」

「クラブで若手の育成をしっかりしていくべきだ」

そんな中で僕は、クラウドファンディングに挑戦するアイデアを出した。

これまでも、シューズの支援をするときに、何度かプロジェクトを立ち上げたことがあった。だが、なかなかうまく行かず、数万円程度の資金になった程度だった。

だが、また挑戦してみれば、今度はうまく行くかもしれない。数回目となるクラウドファンディングは、僕一人で立ち上げた。リターンにはお礼の動画メッセージや、チームのユニフォームなどを設定した。プロジェクトのページには、僕の思いを書いた。

「サッカーというのは夢があり、人々に感動を与えるものだと思います」

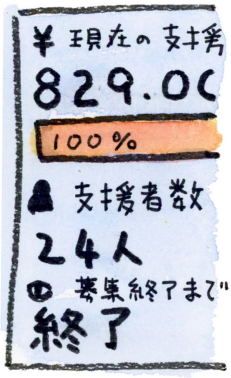
僕は文中のその言葉を太字にした。

そのころには、僕のことを「海外のサッカー選手」というだけでなく、「社会貢献する

アジアのサッカー選手」と認識してくれている人も増えていた。ただの「サッカー選手」と表現すると、Jリーグや日本代表の選手など、もっとすごい選手がいる。そこで埋もれることのないよう、「社会貢献」という言葉を使って発信するように心がけてきた。

それが功を奏したのか、クラウドファンディングは目標金額を達成することができた。

クラウドファンディングによるもうひとつ大きな収穫が、大塚さんと出会えたことだった。大塚さんは、クラウドファンディングのページから「応援したい」とメッセージをくれた。事情を話し、クラウドファン



ディングとは別の形で資金面の援助をしてくれることになった。

「ラオスでお金がない中、試行錯誤して頑張っている姿に感動しました。卓矢さんがやっている活動には価値があると思う。ただ、価格が付いていないだけだと思うんです」

大塚さんはそう言ってくれたが、僕はもっと価値を創造しなくてはいけないと考えていた。

「ありがたいのですが『スポンサーが付くほどの価値がない』というところからスタートしなくちゃいけないと思っています。正直、以前は『サッカークラブだからスポンサーが付くのは当たり前』と思っていたところがあるんです」

「どういうことが価値になるんですか？」

「僕が幼少期に感じていた柏レイソルの存在にヒントがあると思っています。例えば、地元の少年団のサッカークラブに柏レイソルの選手が来てサッカーを教えてくれたり、小学校でプレーしているサッカー少年を無料で試合に招待してくれるなど、地域に貢献する活動がありました。それによって、市民がサッカーチームのファンになり、もっとサッカーを好きになる。そういう小さな活動のひとつずつが、サッカーやサッカーチームの価値を高めていくんだと思います」

僕は信念を新たにして、他の選手の協力を得ながら、地域の活動を増やしてチームを盛り立てていった。

ただ、応援してもらうには、試合の結果も必要だ。ビエンチャンＦＣは、決して強いチームではない。選手たちも、「頑張っても勝てないだろう」と考えてプレーしているのがわかる。マインドから変える必要があるのだ。

「『勝てる』と思って試合に臨むためには、『勝てる』と思える練習をしなくてはいけない」

選手としてだけでなくマネジメントも担当するようになっていた僕は、選手にそのように伝え「練習時間の三十分前に集合する」というルールを決めた。

ラオスのチームだけでなく、僕が在籍したことのある東南アジアのチームはすべて、選手は練習に遅れてくるのが常だった。だからこそ、僕はチャンスがあると思ったのだ。他のチームがどれだけ遅刻していても、僕たちのチームだけは三十分前に集合する。

最初は、ほとんどの選手がただ早く来て座っているだけだった。だが、僕を始めとする数人がウォーミングアップをしたり、個人練習をしたりする。すると、徐々にひとり、ふたりと個人練習をする選手が増えてくる。

真面目に練習している選手を試合でも使ってもらうように監督に働きかけ、より活躍で

きるようにした。

「早く来た三〇分を有効に使うといいことがありそうだ」と肌でわかってくると、もっと練習に身が入る。そのうち、目で見てわかるほど、実力に差が出てくる。

最初は、少数のメンバーが恥ずかしそうに自主練していただけだったが、だんだん人数が増えて当たり前になると、自信満々にできるようになっていく。同時に、普段の練習もよりハードなものになっていった。

すると、練習試合で勝てる試合が増えてきた。

リーグ戦で戦ってみると、本番の試合でも勝つことができた。「頑張って練習すれば勝てる」とわかってからは、さらに精力的に練習する。時に、試合で負けて涙する若い選手もいた。クラブの雰囲気は確実に、価値を高める方向に向かっていた。

翌二〇二一年を迎えると、少し早く次のシーズンの準備を始めることにした。これまで、シーズンに合わせて海外の選手を採用していたが、今年はそんな余裕がない。

「国内で眠っている才能を見つけよう」

ビエンチャンFCとして、セレクションを開催することにした。なんと九十七人も集まり、何人かの選手を採ることもできた。

「今年は優勝を目指す」

その目標に一緒に向かってくれる選手を集め、既存のメンバーも、そう思ってくれる人だけに残ってもらった。

「シーズンに向けて準備が整った！」

そう思った矢先に、出ばなをくじかれる。

四月下旬、コロナウィルスの蔓延により、リーグの中断が決まったのだった。

頑張ってきたことが無駄になったようで数日間はショックを隠せなかった。だが、ずっと落ち込んでもいられない。外出が禁止された時期もあったが、早朝に誰もいない時間を見計らってランニングをするなど、できることは続けていた。

ところが、努力むなしく、八月末にリーグの中止が確定してしまう。

サッカーができないなら、できる場所へいくしかない。僕は、チーム内の選手に「一緒に海外に移籍しないか」と持ち掛けた。だが、彼らの言葉は驚くべきものだった。

「タクヤ次第」

それは、「タクヤが支援してくれるなら」「タクヤが応援してくれるなら」という意味だった。僕は彼らを導いているつもりが、いつの間にか、彼らの主体性を削いでいたのだろうか。

「タクヤ次第」というその言葉は、思った以上に心をかき乱し、自分の無力さを思い知ることにつながった。

二〇二二年が始まり、次のシーズンの準備をしなくてはならない時期になると、心の中で「ラオスを離れる」という選択肢が色濃くなってきていた。

クラウドファンディングをきっかけに支援してくれていた大塚さんも、「愛着があり、毎年支援もしているカンボジアに戻るのがいいのでは」と言ってくれ、僕もその気になっていた。

ところがある日、ラオスのエズラFCというチームのマネージャーであるアイザックから、「話がしたい」とカフェに誘われたのだ。

「次のシーズンから一緒にやりたいと思って誘ったんです」

アイザックは、頼んだコーヒーがまだ来ないうちに話し出した。

「エズラは、外国人を採用しないんじゃないんですか」

エズラFCは外国人選手を採用していない。僕はてっきりチームの方針なのだと思っていた。

「私がクラブに来てから十年間、外国人選手は使っていません」

「何か理由があるんですか？」

「外国人選手が嫌いだから」

そうハッキリ言うアイザックに、ちょっと笑ってしまった。

「外国人を使おうと考えたこともあるんです。でも、外国人選手は自己中心的なプレーをする。それにはもちろん、自分の評価を上げていかなければならないという側面もあるでしょう。ただ、それにしても強すぎます。チームの結果より、自分のパフォーマンスを考える外国人の姿勢は、ずっと好きになれませんでした」

「ハハハ。そういう側面はありますよね」

二人分のコーヒーカップがテーブルに置かれると、アイザックは砂糖を入れてコーヒーを一口飲んだ。

「これまでは外国人選手に対して否定的な意見しか持っていませんでしたが、タクヤなら一緒にやりたいと思ったんです。外国人選手に対してこんなことを思ったのは初めてですよ」

そこまで評価してもらって、僕は話を聞いただけで「やりたい」という気持ちが湧き上がった。アイザックはさらに続ける。

「これまでは、優勝しなくてもいいから、精一杯やろう、というのがチームの方針でした。でも、僕は優勝したいと思うようになった。だから、タクヤの力を借りたいんです」

その口説き文句で僕の心はほぼ決まった。これまで、ビエンチャンＦＣで優勝を目指してやってきたのに、途中で終わってしまったと感じていた。今度は、本気で優勝を目指したいと考えているアイザックと、一緒に挑戦できるのだ。

ただ、返事をする前に練習を見せてもらいたいと、後日クラブチームを訪れた。

エズラはキリスト教を信仰する韓国人が母体となっているチームで、グループ内に小学校や中学校もある。キリスト教のもとで教育を行うことが主目的で、サッカーはそのツールのひとつ、という位置づけだ。

「結果が出なくても、頑張っていれば『グッジョブ』『よくやった』と褒めるのが私の常だった。だが、目標すら定まっていない状況では頑張れないんじゃないかと思った。そもそもの目標がないのは、『頑張っても目標に到達できなかった』とは違う。だから、これからは方針を変更し、目標に近づく結果が出たら『グッジョブ』だ」

これは、僕がチーム入りした後にアイザックがみんなの前で言っていたことだった。

エピローグ

ギリシャ神話に出てくる勝利の女神Nike（ニケ）。スポーツブランドのNike（ナイキ）の由来でもあるニケには兄弟がおり、名をZelos（ゼーロス）という。情熱や熱意の神様だ。その名前をいただいて、二〇二二年一月に、一般社団法人Zelosを立ち上げた。

僕はサッカーによって、たくさんのことに挑戦する機会を得られた。頑張ってダメなら仕方ない。でも、頑張れる環境にいない人たちもいる。

頑張りたいのに頑張れない状況にある人がいたら、それをなくしたい。まずはラオスで。それから、他の東南アジアの国々でも。

「それは、ラオスの国を変えることかもしれない」

ラオスの知人に話すと、そう言われた。

確かに、ビエンチャンFCにいた頃から「頑張っても意味がない」という選手たちの雰囲気を感じていた。ラオス全体がそういう文化をまとっているのだろうか。

だが、日本はどうだろう。「頑張れるだけ頑張ろう」という生き方をしている人が、は

たしてどれくらいいるのか。

「将来の夢とか、ないです。頑張っても疲れるだけだから、とりあえず就職かなって思っています」

日本で大学生と話をしたときに、彼の口から出た言葉だ。「頑張っても仕方ない」は、ラオスだけの問題ではなかった。

スポーツなら、頑張りが成果となって表れやすい。筋トレを続ければ筋肉が付くし、練習すればうまくなれる。だが、続けようと思った時に、応援してくれる人がいないと続けるのが難しい。それが僕の実感だ。

「頑張れば報われる」と言葉で言うのは簡単だが、世の中はそんなに甘くない。

「頑張れば報われることもある」が、正しい。

じゃあ、報われるのはどんな時なのか？　それは、その「頑張り」が社会的に価値のある場合だ。

価値が認められていないなら、評価される努力もしなくてはならない。つまり、評価されるような環境づくりが必要だ。

環境には、場所よりも人が大事だと思っている。応援してくれる人、練習を見てくれる

コーチや監督がいてこそ、それぞれがお互いに情熱を持ち、応援し合い、成果を出すほど報われる、という循環を作れる。

僕自身は、小学校のころからJリーグクラブが近くにあり、サッカー選手になりたいという夢を持った。周囲のみんながそれをすんなり応援してくれた。僕は、とてもラッキーな環境にあったのだ。

これまでのような社会貢献活動を通じて、挑戦できる環境、応援し合える環境を、僕はZelosという法人で作っていく。

僕が海外に出てまで頑張ろうと決意した影には、地元柏市の柏レイソルというサッカーチームと共に、『食事処とんき』のお母さんやお姉さんたちの存在がある。

食事を通して、プロサッカー選手が重ねている苦労や努力を教えてくださった。時には、選手の横に座らせてもらい、ご縁をいただいた。

また、海外での活動時には貴重な人とご縁もいただき、本当に感謝している。この場を借りてお礼を伝えたい。

ありがとうございます。

地球を履いて

二〇二三年四月十一日　初版第一刷発行

発行者　大塚雄三
文　栃尾江美（株式会社writeln）
イラスト　小池アミイゴ
デザイン　株式会社There There

※この物語は実話に基づいています。

プロフィール

渡邉 卓矢　Takuya Watanabe

Estudiantes de la plata（アルゼンチン1部／レセルバ3軍相当）→ JSC Niigata → Sportiva Tsukuba → HBO Tokyo → CMAC UNITED（カンボジア1部）→ Goyo FC（モンゴル1部）→ Selengepress（モンゴル1部）→ Three Star Club（ネパール1部）→ Selengepress（モンゴル1部）→ Samutprakan FC（タイ4部）→ Athletic 220（モンゴル1部）→ Viengchanh FC（ラオス1部）→ EZRA FC（ラオス1部）

発展途上国の国々でプレーをして、孤児院への訪問や支援活動をする中で、「本当の豊かさとは何か？」という疑問を抱きました。サッカーは世界中どこにでもあり、ボールひとつでコミュニケーションをとることができます。しかし、まだ日本のすぐ近くのアジアの国々では、恵まれた環境があるわけではありません。幼少期、Jリーグが発足。サッカー選手は僕に夢を与えてくれました。僕自身もサッカーをとおして子供たちに夢を与える活動を積極的に展開していきたいと思っています。

Takuya Watanabe：https://takuyawatanabe.jp/
一般社団法人Zelos：https://zelos.or.jp/